

円地文子著『朱を奪うもの―三部作―』論

——主人公滋子の特徴的心性をめぐって——

野 口 裕 子

はじめに

昭和四十五年二月、篠田桃紅装幀の、黄金比より横がやや長く正方形に近い函入りの『朱を奪うもの』が新潮社から刊行された。その背には『朱を奪うもの―三部作―』と書かれ、『朱を奪うもの』『傷ある翼』『虹と修羅』はここに作者自身によって三部作となされたのである。この三部作は、昭和四十五年九月三十日に第三回谷崎潤一郎賞を受賞しているが、円地文子自身もその選考委員の一員で「最初の選考の時、予選されていた作品が昨年十一月刊行した『虹と修羅』だけであつたら、三部作の一部分だという理由で辞退するつもりであつたが、三部作全部を対象とされていたので、立候補する気になつた」⁽¹⁾と述べ、三部作を一つとして考えることを強く望んでいたことが窺われる。本論では、『朱を奪うもの―三部作―』を一つの作品として捕え、論考を進めていきたいと思う。(以下『朱を奪うもの―三部作―』は『朱・三部作』と略記する)

一、

『朱・三部作』には、奥野健男の「言葉の正確な意味での、自伝的小説」^②、平野謙の「ほとんど自伝的小説とよんでさしつかえない」^③、瀬沼茂樹の「半自伝的」^④という〈自伝〉との言葉の冠せられた評が多くある。それは作者自身も述べているように「女主人公を、青春時代に戯曲を書き、後に小説を書くことを仕事とする女として設定」^⑤したためである。だからこの小説では「かなり濃密に作者の生涯や体験が、宗像滋子に投影されて」^⑥おり、「恋愛観、結婚観、社会観などの内面生活において、女主人公と著者とは娘と母ほどの濃い血縁関係」^⑦にあると言うことができる。が、だからと言って、この小説を評す時に〈自伝的〉という言葉が不可欠であるとは考えられない。円地自身も「私は『私小説』の書けない人間なので虚実をわがままに交せて小説の形に作り上げている点では、これも他の作品と殊に色分される必要のないものである。自伝という肩書はこの際改めて返上して置きたい。」^⑧と言い、〈自伝的〉と読まれることを嫌っている。〈自伝的〉という語は作者の実生活を引きずって誤った見方を招く原因となるものであり、さらに〈自伝的〉という語によって安易に説明されてしまう危険を冒すことにもなりかねない。ここでは積極的に自伝と言う語を返上して考えを進めたい。

作者は『朱・三部作』で「自分の経験を自由に誇張したり、粉飾したりして物語ろうとした」^⑨のだ、と言っているが、この「経験」はあるがままではなく、作家円地文子の感性というフィルター通ったものなのである。つまりフィルターを通るということが、結果として「誇張」になり、「粉飾」になるのである。例えば、主人公滋子が宗像に対する憎悪を募らせる「新派悲劇じみた物語」があるが、これは円地文子の実人生で起こった出来事に取材したものである。「夢うつつの記」には「子供が生まれてから八ヶ月ぐらいのとき」「彼が女のことでごたごたして、日々

新聞を休職になった」⁽⁸⁾ことが書かれている。この時「夫を嫌っていながら、随分、夫のために尽力し」、「夫と一緒に、そのK氏（日々新聞顧問……注野口）を訪ねて夫の立場を弁解したりした」⁽⁹⁾ことも書かれている。これに対して『朱・三部作』の中の事件は、宗像を「女全体から軽蔑されても仕方のない」男とし、この事件で傷ついた滋子の心は永遠に癒されないものになっている。これは現実而起つた事件よりはるかに醜悪に、滑稽に描かれている。それは円地文子の感性が捕えたこの事件の重さであり、痛みであり、見苦しさなのである。個人の経験は作者円地文子の体内に取り込まれ、醸成され、紡ぎ出され、「新派悲劇じみた物語」となったのである。換言すれば、その確かな感性によって普遍化されたということができよう。このように『朱・三部作』には、滋子という主人公の生き様という媒体を通して、円地文子の感性が積み上げられているのである。勿論これはあらゆる小説について言い得ることであるが、この作品は円地が作家としての自身の原点を語つた作品であり、その感性はより率直に示されていると言ふことができる。このフィルターを見極めていくこと、即ち円地文子独自の感性を探り出していくことは、『朱・三部作』を読み解いていくことそのものであり、主人公滋子の極めて精神的な生き様を検証し、その特徴的な心性に迫っていくことなのである。

一一、

小説は滋子が歯を全部失つたところから始まっている。その歯の喪失が三度目であると気づき、二度目の子宮癌の手術後の不安へと思いを遡らせていくのである。子宮を失い「性の喪失がやがて生きる力さえ失わせるのではないかと不安に苛まれる」滋子を力付けたのは、司馬遷が『史記』を書いたことであつた。この連想は滋子自身も「自分の思索自体の奇妙さ」を「滑稽に感じ」るものである。このような奇妙な連想をさせるもの、それが滋子の心性を決定

づける「化物」だというのである。「生きた人間を見失」い、「生きた人間の生活にあるものよりも、遙かに貧婪なめざましい世界を無自覚の中に外から与えられ」、その結果「アブノーマルに変形させ」られた滋子の心性、それが「化物の正体」である。滋子を歪めたのは、祖母から聞いた江戸時代の読本・草双紙の物語や演劇の指導者であった父から与えられた劇場的世界であり、「典型化された見事な世界」であった。それらが滋子を現実から遠ざけたのは、「どんな人生の現実よりも鮮麗な色と光と匂い」とがふんだんに漂い、人間以上に人間臭い官能や叡知が顕現するように思われた」からである。滋子は人工の陥穽にももの見事にはまってしまったと言うことができる。それは滋子という人間にとって決定的な出来事であり、重い荷を背負うことであった。愛情についても、滋子は「愛すという能力」が現実の生活の中で育っていくものだとはいえないうちに、「愛情や憎悪やその他のあらゆる人生の喜怒哀楽が表現を通して典型化された見事な世界」の愛の形を知り、それを至上のものと思ってしまうのである。だから「愛情の求め方でも滋子が本の中で読んだような表現は一柳にはなかった」という滑稽な感じ方がなされるのである。先に「滋子を歪めた」と書いたが、これは厳密に言うところとふさわしくないのかもしれない。客観的には歪められていない精神である。「ストイックな道徳性」「武士道的倫理観」も、滋子の「歪んだ精神」の一部だからである。それは「節操とか名誉とかを物質より遙かに高く置く」もので、宗像勘次とは決して相容れない心性であり、歌舞伎役者市山扇升の家で異常に傷つくものとなるものである。このように「不自然な観念の奴隷」である滋子は——「不自然な観念の奴隷」という時、「不自然」という語は奴隷状態にあることを批判すると共に強調しているのであるが——「自分を籠めていた観念の亡霊の擬い易くうつろい易い危さに気づいて慄然」としても、その壁をうち破ることはできない。観念に先行され、生身の肉体を引きずるようにして生きていくしかない。

このような滋子を捕える思いの中で最も強いものが「ひもじさ」である。滋子は何故いつも「ひもじい」と感じているのだろうか。「ひもじい」と思っただけで一体何を求めているのだろうか。「自分の神を持っていないことは、いつも私

をひもじくものほしくした」とあるが、それだけでは滋子が「ひもじい」理由にはならない。滋子にとって「ひもじい自分の心」は「作品を創ること以外」に「表現する方法」はない。そして、この「ひもじさ」は「垢つき穢れ、鈍く地に蠢きながら猶生きねばならぬ人間のひもじさ」である。「人間のひもじさ」とは、人間が人間として生きていく上で必ず抱え込まねばならないものということである。あらゆる困難を越えて人が求めないではいられないもの、それは愛をおいて他にはない。「ひもじさ」は坂本育雄氏が言うように「求めて得られぬ愛への渴望」^⑧なのである。

滋子は初めて幼い社会の一員になった時、仲間外れにされ「意気地なくしょげて」ひもじい思いをしている。その「ひもじさ」故に人は人を愛し、愛することによって初めて「愛」を得るのである。が、滋子は誰にも積極的に愛を与えようとはしていない。後にはあれほど執着する一柳との恋愛でも引つ張られるように恋愛関係に入って行き、ただ自分の考える「愛の手形」を得たいと思っただけである。つまり、「観念で一柳を愛している」のであり、常に自分の頭の中にある「愛」を求めているだけなのである。与えることもせず、ひたすら求めるだけの滋子は、それ故にいつも「ひもじい」のである。『朱を奪うもの』の中でたった一度だけしか使われなかった「ひもじい」と言う言葉が『傷ある翼』『虹と修羅』のなかで多用されているのも、そのことを裏付けていよう。つまり、『朱を奪うもの』は「ある少女期から青春期に至る、精神の形成を描こうとしたもの」^⑨であり、ここではまだ主人公が「ひもじさ」を切実に感じるに達していなかったからである。また、このように考えてくると、「ひもじい」と感じるのは「化け物の仕業であるということもできる。自分が描いたあるべき姿の「愛」しか信じられずに求め続けるのは「観念の奴隷」^⑩になっていくからで、それは主人公滋子の不幸であると同時に、作者自身にも影を落とす感性ではなかったらうか。いつもただ求め続け「ひもじい」と思う滋子は、その一方で持っているものを失っていく。それが喪失であり、『朱・三部作』には三つの喪失が書かれているが、これらの喪失を滋子は遅く受け入れ、克服していつている。「観念の奴隷」となっている滋子ではあるが、死に繋がる喪失は、観念の及ばない生身の滋子の現実だからである。尤も、

齒の喪失の後の滋子については、直後の様子が描かれているだけで殆んど書かれていない。また、滋子がこの時何才であるのかも明らかではない。『虹と修羅』は「四十になったばかりの滋子」が子宮癌の宣告を受けるところから始まっていて、半年ほどの入院生活の後、待ち構えていたような娘美子との修羅を「三年ほど前の美子と自分のもつれ合った狂態」と思い出しているのは、柿沼の入院を知った時である。その後丸一年で柿沼は死に、その追悼会の夜で小説は終わっているから、滋子はせいぜい四十四、五才である。また、「入院中に欠けた前齒の一つをまだ治さないので、口もとも寒々しかった」と書かれているから、すべての齒を抜くまでにはかなりの歳月が経過がある。年齢こそ定かではないが、齒の喪失を迎えた滋子はもう「へ老い」に足を踏み入れている。つまり、この喪失が象徴するのは「へ老い」なのである。だから、滋子は自分の「生命の一部」の死を見ていると感じ、抜かれた齒を「自分の骨」と見るのである。その「へ老い」の意識には静かな諦観が感じられ、過去への回想を誘っていくのである。それに対して、一度目の右の乳の喪失は次への序章であり、子宮癌での喪失は性の喪失そのものであった。子宮癌の手術の折、滋子は初潮を迎えた時のことを幻覚に見る。女の性が始まった時のことが、その喪失の際に甦ってくるというのは実に見事であるが、切実で哀しい幻覚である。この「女としての喪失の思い」は、「女として」の部分に留まらず、その女の生きる力を失うことになっていくのである。それは手術後、女の身体の中にできる「わけのわからない空洞」⁽⁴⁾。『死口』⁽⁵⁾のためである。「死口」は「全く死にだけ通じる洞」⁽⁶⁾で、埋めることは死を封じることとなり、女の生きる力を回復させる唯一の方法である。それはまた、「女として」の再生にはかならない。

二二、

「人は女に生まれえない。女になるのだ。」とは、ボーボワールの言葉であるが、それほど自覚的でなくとも、女は女

を意識した時、一つゝ壁を越えなくてはならない。しかし、女になった時、つまり初潮を迎えて、「敗北感」を持った女はそう多くあるまい。滋子は「敗北感が身体の内部分から不安に重苦しく」「押し揺さぶっている」のを感じ、更に「何とも言えぬ悲しみ」までかき立てられている。その悲しみは「勝てないもの……そう抗つても勝てないものへのやるせない愛執だった」と説明されているのである。「勝てないもの」とはへ女であること、へ女そのものである。どうあがいてみても自分がへ女であることからは逃れられない。滋子はその時からへ女を生き始めねばならなかったのである。この女になったことの「敗北感」はどこから生まれたものであろうか。男社会の中で社会的に不利、などという女権主義の立場に終始するものでないことだけは少なくとも確かである。毎月一度子宮から流れる血、現実の煩わしさやへ月の障り、と言うような古風な考えに因るのではなく、秘匿しなければならぬという何か陰湿な匂い、羞恥に絶えず曝されることへの怖れがそこにはある。円地自身の話の中に「父は私のことを、よく、『こいつが男だとよかった』と言っていた」^四と書いている。これそのものは、この記事のすぐ前にある「私自身（中略）よくいえば王朝女流文学者の亜流」^四と共にへ今紫式部」という自負を語るものの一つであるが、敬愛してやまない父上田万年の言葉は、女であることの「敗北感」を誘うものであったに違いない。

この小説では、今更言うまでもないことだが、滋子が父の死後、養女として育ててくれた伯父の家を出るための「スプリング・ボード」として結婚した宗像勘次との生活が話の中核にある。滋子にとってこの結婚生活は、「自分の脆弱な精神の基盤を突き崩す思いがけない強大な敵が潜んでいた」であった。ここで言う「敵」とは現実であり、子供まで儲けた「かりそめならぬ夫婦の縁」である。また、滋子は文学でなんとか生きようとする自分の生活が、一般の主婦には理解して貰えず、「いつまで現実に対して勝ち目のない勝負をしているの」だと思っている。このように滋子の他との関わり方は、勝ち負けで表現されるような常に極めて対立的なものである。滋子が鎧を着て——その鎧こそ観念なのであるが——周囲に立ち向かっている姿が浮かんでくる。円地が『朱・三部作』で描こうとした一人の女

の生き方、その生き方が他と闘っているという生き方であり、周囲に流されまい、負けまいと生きた女の生の歴史なのである。それは自立して生きようとするすべての女が本能的に知っている歩みである。そして、殆んど女には無自覚にはあるが、あの「どう抗つても勝てないもの」に根源的に繋がって行く感覚ではあるまいか。だからこそ、円地の描く女が世の多くの女の共感を得るのである。

滋子を巡る男たちは、「スプリング・ボード」と考えた夫宗像、そして一柳、柿沼がその中心となる。結婚後再会する一柳は結局彼の方から去って行くのだが、滋子は執着し追いかけながら、自分が愛しているのではないことを自覚している。それどころか「一柳を愛していることを無理にも自分に認めさせよう」としている。滋子が一柳との恋愛に求めているのは「姦通の持つ社会的には甚だ不名誉な選民意識であり、その意識を満足させる装飾として、思想上の敗北者である一柳の、切り傷の新しい傷痕」なのであった。つまり滋子は自分が姦通しているという事実のために「観念で一柳を愛している」にすぎないのである。それに対して柿沼は一見、滋子の純粋な恋愛相手のように見える。しかし、実際にはあまりにも都合よく存在している感が強く、實在感に乏しい人物である。こういう男たちに対して、宗像勸次は終始一貫して、その欠点ばかり描かれている。が、「良人宗像勸次は、三部作全部を通じてもっとも活々と描かれた男性」⁽⁴⁾であり、「宗像の姿の方がなぜか納得できる」⁽⁴⁾のである。それは単にモデルが存在するということに因るのではなく、「女主人公の宗像に対する厭悪がよむ人につよく移入されるから」⁽⁴⁾と考えられる。しかし、滋子が宗像に抱くのは「厭悪」だけではない。「好意も尊敬も持た」ないで結婚しながら、「夫婦の業を感じさせる肉親じみた絆」をも育てているのである。

さて、この「業」という捕らえ方は『朱・三部作』の中で何度か使われ、また他の円地作品にも繰り返し用いられているものである。『朱・三部作』の中で「業」は六度用いられているが、その中四度は滋子の心性を説明しており、残りの一つは一柳についての分析を柿沼が行った折に、もう一度はこれもまた、柿沼によって自身のキリスト教入信

を説明する時に「東洋的な業の意識」として使われている。「業」は仏教用語であるから「東洋的な業」というのは原義に近いと言つてよく、ここでは問題にならない。他のものは「ものを書くことを業とする」「夫婦の業」「劇場にまつわる業」「絶対權威に無関心でいられない業のようなもの」と、一柳についての「一つところに沈潜することの出来ない業のようなもの」である。明らかに後の二例はへようなものとなつており、かなり説明的な言説が用いられ、当然のことながら「業」からは一步後退している。「業」はへ女の業になり、円地作品を表す言葉としてあまりにも安易に、便利に使われ、その意味も検討されず、おどろしい意味合いを与え過ぎているように思う。先に滋子の他との関わりについて述べたが、それと同様、他との関わりが自身に向かつている時に用いられる言葉が、「業」なのである。「ものを書くことを業とする」——結局へ作家の業——ということであるが——は「ものを書くこと」が自身に向かつてくることを「業」と呼んだのであるが、「業」と表現せざるを得ない心性が円地自身にあるということになる。それは他との関わりを対立的にしか捕らえられなかつたのと同源である。「業」と同様、よく使われる語に「復讐」があり、小松伸六氏をして「円地文字の作品は『復讐の文学』といえるかもしれない」^例と言わせたものである。その例を上げてみると

・ 私はこの人に抱かれている時に、この人に一番きびしく復讐している快さを感じると滋子は思った。

・ 女の男に対する一番残忍な復讐は妻が夫以外の男を愛すことなのだ。(中略) 女の復讐は、男が自分の血のつながらない子供を、自分のものだと信じて抱く時に完全に悪魔化すると言つてよいかもしれない。

・ 一柳との恋愛は宗像に対しての復讐の快さを満足させることが出来たが、(後略)

これがすべてではないが、どれも恐ろしい響きを持っている。が、この「復讐」という語も、他との関わりの一つの型にすぎない。その関わりの中で他に立ち向かつて行く時、「復讐」となるのである。尤も「勝負」に比べると「復讐」ははるかに攻撃的である。

逆に他が自身に向かつて来る時も

・ 自分の生きるのに都合のよい相手を選ぶようにする本能に対する無知が観面に私に復讐するのだろうか。

・ 現実から復讐されるに違いない性質のものであった。

のように用いられている。他との関係で自分に向かつて来る時「業」と捕らえる心性は、他者に対する積極的な関わり方を「復讐」と捕らえるしかないのである。先の三例の「復讐」は男と一般化されていても、結局宗像に向けられているものである。宗像との関係を「業」と捕らえた滋子は、どれほど嫌悪していても、「復讐」という形にしる、積極的に関わりようとしているのである。それは一柳や柿沼が一見滋子に愛されながら、結局は便宜的な関わりでしかなかったのと対照的である。

おわりに

この『朱・三部作』は、その長さからも円地作品の中心をなす作品である。そして主人公滋子の生命の歴史を辿るとしながら、結果として滋子の特徴的な心性を描き切った小説である。それは滋子が、自らの心性を矯めることなく、むしろ前に押し出すようにして生きたからである。その生き方は観念に先行され、不器用で非効率的な生き方となった。が、また他との緊張した関わりの中で精一杯自己に忠実に生き抜こうとする女のひたむきな生への希求であり、その証を求めずにはいられないという女の迪々しい生き様であった。そしてそこには、円地文子が滋子に託した作家円地文子の精神の歴史が示されていたのである。

完

付記、本部引用は円地文子全集（昭和五二年九月から五三年十二月 新潮社）第十二巻による。また、本文引用はすべて「」で示した。したがって、注表示のないものはすべて本文の言葉である。

注

- (1) 円地文子 「谷崎潤一郎賞を受けて」（『中央公論』昭四十四・十一月号）
- (2) 奥野健男 「朱を奪うもの」解説（昭三十八・四月 新潮文庫）
- (3) 平野 謙 「円地文子文庫第二巻」解説（昭四十・五月 集英社）
- (4) 瀬沼茂樹 「展望現代日本文学」（昭四十七・九月 集英社）三四八頁
- (5) 円地文子 前出、注(1)
- (6) 円地文子 「傷ある翼」あとがき（昭三十七・三月 中央公論社）
- (7) 円地文子 「愛情盲目鬼」（『女を生きる』所収 昭三十六・六月 講談社）
- (8) 円地文子 「夢うつつの記」（昭六十二・三月 文藝春秋）一五五頁〜一五六頁
- (9) 坂本育雄 「円地文子」（『解釈と鑑賞』一九八五・九月 至文堂）
- (10) 円地文子 前出、注(1)
- (11) 円地文子 「耳環珞」（円地文子全集第二巻）三六八頁
- (12) 円地文子 「私の愛情論」（昭五十五・十二月 主婦と生活社）四九頁
- (13) 三島由紀夫 「第五回谷崎潤一郎賞選評」（『中央公論』昭四十四・十一月）
- (14) 平林たい子 「円地文子『虹と修羅』（『群像』昭四十四・一月）
- (15) 小松伸六 「平林たい子・圓地文子集」現代文学大系（昭四十・九月 筑摩書房）五〇五頁

——大学院博士課程後期課程——

